

心の扉を

開いたら

患者会・福祉団体便り

沖縄で「ガジユマルの木」にはキジムナーが暮らしている」と語られたように「赤ちゃんはコウノトリが運んでくる」と子どもたちが信じていた時代がありました。欧州では、春になると飛来するコウノトリが家庭に幸せを運んでくる鳥として語り継がれ、子どもたちに夢や希望を与え、家族の幸せを願う、ほほえましい言い伝えでした。

しかし、障がいのある子の誕生によって、家族の生活や人生が大きく変わることであります。わが子に障がいがあると分かった時、母親は「自分のせいではないか」と責め、父親は「これからどうすればよいのか」と戸惑います。誕生を待ち望んでいたわが子と、思い描いていた未来の夢を全て失ったように感じる夫婦の苦しみは、経験した者でなければ分からないほど深いものです。

さらに、家族を支えるため仕事に追われる父親と、家事や障がいのある子どもと育児を自分一人で抱えていると感じる母親との間に、心の溝が生まれることもあります。その積み重ねが夫婦を疲弊させ、離婚に

沖縄県手をつなぐ育成会顧問 田中 寛

この子がいてくれてよかった

つながることもあります。一方で、多くの家族は悩み、迷いながらも、苦しみを分かち合い、支え合って乗り越え、温かな家庭を築いています。わが家では献身的な母親の愛情に支えられ、短命と言われたダウン症の長女も、明るく素直に成長し、53歳になりました。自立した妹や弟夫婦も、孫たちを連れて頻繁に訪ねてくれ、姉を慈しみ、励ましてくれます。

娘との暮らしを通して、私は家族の優しさと支え合うことの尊さを実感してきました。「もしかしたら娘は、わが家を選んで生まれてきてくれたのではないか」と思えるほど、娘はかけがえのない存在となり、娘が生まれてきてくれたことに心から感謝しています。子育ての道に正解などなく、行き詰まったと思ってもそれは終わりではありません。まだ見つけていない道が、きっとあります。「笑うも一生、悔やむも一生」、「雲の上には、青空がある」という言葉があります。今、子育てで悩みを抱えている方は一人で抱え込まず、夫婦で、家族で、周囲の人と支え合ってください。いつか振り返った時、「この子がいてくれてよかった」と心から思える日が、きっと訪れると、私は信じています。

◇県自立生活センターイルカの掲載は9月30日に延期します。育成会の次回掲載は10月28日の予定です。